

令和 6 年度第 1 回 八尾市社会福祉審議会 地域福祉専門分科会

議事概要

日 時：9 月 19 日（木）午前 10 時～11 時 50 分

場 所：八尾市立社会福祉会館 2 階 集会室

出席者：委 員 14 名（欠席 6 名）

事務局 13 名

株式会社サーベイリサーチセンター

大阪事務所 2 名

※中間見直し支援業務受託者

1. あいさつ

2. 委員紹介

3. 案 件

（1）第 4 次八尾市地域福祉計画（中間見直し）への意見反映

＜事務局から下記の資料を説明＞

※資料 1－2 については、中間見直し支援委託業務受託者である株式会社サーベイリサーチセンター大阪事務所より説明

【資料 1－1】第 4 次八尾市地域福祉計画 中間見直しにあたっての意見反映（まとめ）

【資料 1－2】地域福祉に関するアンケート調査結果概要＜速報版＞

【資料 1－3】令和 5 年度社会福祉審議会及び地域福祉専門分科会 総括

【資料 1－4】重層的支援体制整備事業の実施体制（イメージ）について

【資料 1－5】つなげる相談支援体制WG会議等での意見

【株式会社サーベイリサーチセンター大阪事務所 説明概要（資料 1－2）】

- ・他市でもアンケート回収率は低下しており、4 割を切る自治体がほとんどで、今回の市民アンケート回収率 37.6%は平均的ではあるが、今後も WEB 回収など回答率向上のための工夫が必要。なお、アンケート回答の有効性は、おおむね回収数が 400 票以上あれば有効であるとされており、標本誤差の問題は生じていない。
- ・市民アンケート概要から、近所づきあいの希薄化は、他市同様に進んでいることが分かる。
- ・福祉関係者アンケートから、地域の活動や行事は『活発である』（「大変活発に活動している」と「どちらかというと活発に活動している」の計）と回答した人が 7 割と、他市よりも高いことが特徴。

- ・福祉活動をさらに進めるためには、担い手の確保、人材育成が今後の課題である。

〈委員の意見・質問等〉

【 会長 】

- ・府内の会議で出た課題として、「専門分野に限らない連携したうえでの広い分野の対応」「担い手の高齢化、固定化、不足」「自治会加入率の低下」が共通して取り上げられており、新しい担い手の層の確保が重要であると感じている。
- ・テレワークを禁止して、顔を合わせて仕事をするとしている会社もあり、コロナもありリモートワーク等も普及したが、仕事も地域活動も顔を合わせることも重要であると思う。
- ・アンケート結果からも福祉関係者は福祉活動が活発という回答が多いが、市民からするとそうでない回答が多く、実際に活動している人とそうでない人とのギャップがある。

【 委員 】

- ・昔は、近所づきあいが活発で、世話焼きの人がいて心と心が通じ合っていたが、現在は関わってほしくないという人が多い中で、地域福祉を考えることは非常に難しい。一人一人が自立して近所に頼る必要のない人も増え、深い関わりや近所づきあいを求めている人が多い。
- ・苦しい状況にある時に行政の力を借りるという方法があるということを周知する必要がある。

【 会長 】

- ・若い世代を中心に関係性の希薄化が進んでいるが理由の1つとして、生活が便利になり、人に頼らなくても生活できるようになったことも挙げられる。
- ・貧困化が進んでいて経済的に厳しい家庭が増えているが、それはあまり表に出ていない。
- ・おせっかいをする人を増やすことに加えて、受援力（助けを求めたり助けを受けたりする心構えやスキルのこと。）を高めるための地域づくりが必要。
- ・八尾市は地域のつながりが強い地域であると感じているが、そういったところであっても地域のつながりが薄れてきている。

【 委員 】

- ・地域福祉の厳しい状況を変えるためにも計画を見直していくのかと思うが、今の計画のどの部分を法改正等も踏まえて、どのように見直していくのかということが見えにくい。市全体の動きの中でおさえてほしい。
- ・4年間で取り組んできた実績や成果、課題といった評価の部分をもう少し整理してほしい。例えば、地域福祉の広告塔を作るといったユニークな取り組みに対する評価が知りたい。

【 事務局 】

- ・前期の計画期間では、相談支援に特に力を入れてきた。つなげる支援室を設置し、令和5年度から重層的支援体制整備事業を実施して、アウトリーチ（初動支援）を社協にお願いして断らない相談支援体制の構築に取り組んできた。後期の課題としては、担い手の確保、地域づくりや参加支援に特に力を入れて取り組んできたい。
- ・見直しや評価については、次回の分科会でお示ししたい。

【 会長 】

- ・地域づくり系の活動にどのようにてこ入れするかが課題。

【 委員 】

- ・昨日の社協の活動計画に関する会議でも委員から、ヤングケアラーの課題が挙げられ、こども本人はSOSの声をあげずに、自分が世話をするのが当たり前だと思っていることが多く、周りが声を掛けて気づいてあげないといけないといったご意見があり、八尾のおせっかいをどのように出していくかが重要になる。

【 会長 】

- ・家族だから当たり前、家族のことだから誰に相談していいか分からないという人が多い。過度な負担がかかっているにもかかわらず、本人がそれを自覚していないケースがある。そこは学校の役割が重要になる。福祉と学校現場が連携を図り、こどもの言うことだけを信じるのではなく、「超おせっかい」の姿勢で子どもの様子を見たり話を聞いたりすることが重要。この人になら相談しても大丈夫という信頼関係をつくる必要がある。

【 委員 】

- ・八尾市は外国人市民の割合も多く、介護を必要とする方も多くおられるが、宗教上の問題などもありヘルパーが作る食事に合わない方もおられ、そういった理由から自分たちで事業所を作るケースもある。
- ・少数の外国人市民もおられ、家族を頼って日本に来て市営住宅に住んでいるが、通訳ができる人もおらず、自身が寝たきりになっても入院もできず（食事の問題などもあり）、家で小学生等の子どもが面倒を見るといったヤングケアラーのような状況になっている。それに対して地域がどのような関わりができるか考える必要があるが、言葉が通じないため、見守るという結論になっている。
- ・地域に想定外の方がおられた場合、地域住民としてどうしたらいいか悩んでいる。
- ・資料1-1のような考え方が正しいのは正しいが、実際の活動とは異なる部分もあるので、地域福祉計画という理想があるが、それを実際に行う活動計画は社協で行っているため、両者の内容の情報共有をしてもらえればと思う。

- ・地域課題に対応するためセーフティーネット事業を行っているが、地域ですべて対応するのは非常に困っており、地域福祉の担い手に市が押し付けているような部分もある。
- ・社協から地域福祉の活動報告を行ってほしいという話があり、若い世代にも参加してほしいが、そうするとどうしても開催が休日や夜になってしまう。校区外から来ている生徒もあり、その親に PTA 会長をしてもらっており、それが悪いわけではないが、そこから地域福祉活動を考えるのは現実的に難しい。

【 会長 】

- ・「見守り」という言葉は、聞こえはいいが、何もせずにそのままにしているとも捉えられる。
- ・若い世代の担い手の確保が必要であり、60 代でも地域福祉活動における担い手としては、若手と言われる時代。
- ・計画としては良いが、地域の実情とギャップがあるように感じるので、社協の活動計画ともより連携を図り中間見直しにあたってほしい。また、レアケースにも対応できるように実績を重ねていく必要があり、それらの実績に基づく計画にしていかなければならない。

【 委員 】

- ・人材不足が進む中で、介護分野においても外国人採用を進めており、特にベトナム人の雇用が多く、より給与や待遇の良い職場等が SNS を通じて広く知れ渡るようになり、転職も多くなっている。インドネシア、ミャンマー、インドの人材登用も増えているが、外国人労働者が増えると住居の問題があり、市や社協と連絡会を行い、居住支援法人の立ち上げに動き出そうとしている。

【 委員 】

- ・学校から頼まれて不登校の生徒の登校のサポートを行っており、学校と連携を図っている。
- ・民生委員の担い手不足問題で、来年度の一斉改選時には団塊の世代の方が多く退任され、次の層もいないのでかなり厳しい状況。
- ・障がい者の方がここに住んでいるということを地域で把握しておくことが大切。

【 委員 】

- ・関係が希薄になっており、特に若者世代ではそれが顕著である。入会希望者に訪問を提案しても断られる。祝い金や奨学金をもらい、終わればその会との関係性が終わり、それ以降会に関わり続けることもなく、人材が先細りになっている。会を解散するという話も出ているような状況。

【 委員 】

- ・おせっかい人材を見つける、育てるとあるが、今の時代難しい部分もある。近所の人でおせっかいをした方が良いと思うような方でも、深入りすると自分の身が危ないとも思ってしまうし、若い世代は考え方からして違うので関わりを拒否される方が多い。
- ・高齢者は自分のことで精一杯のことも多いので、地域で対応することは難しいと感じる。

【 委員 】

- ・ある地区においては、年少から入れるこども会、青年団、祭り保存会、40～50 代の女性の会など地域福祉活動に関わり続けてもらうことができるようにして人材育成をしながら地域づくりを進めているが、今後どのようにつなげていくかが課題である。
- ・地域の見守りについては社協のスキルアップ講座を受講し、警察や消防と連携しながら対応している。
- ・消防車がサイレンを鳴らさなかったため、近隣の方が火事に気付くのが遅れた。クレーム対応のためサイレンを鳴らさなかったとのことだったが、危険が伴うため、行政と相談が必要だと考えている。
- ・不可解な行動を取る高齢者については、民生委員と連携を図って対応した。

【 委員 】

- ・資料に記載されている内容と委員からいただいた地域の実情にギャップがあるように感じた。今日の分科会の委員意見もそうであるが、市民の声をどのように拾っていくのかが大切である。また、社協が行っている地域のヒアリングもそうであるが、色々な方の声をどのように拾うのかを考えておかないといけない。アンケート回収率が低下したことをどう見るのかも考える必要がある。
- ・担い手確保については、アンケート結果からも、時間が合えば参加すると回答されている方は、行けたら行くわという意味合いであり、実際には来ないと思う。ただそれは、行きたくないのではなく、活動内容等を知らない方も多くおられると思うのでアプローチが必要。

【 会長 】

- ・レアケースを特別視するのではなく、きちんと対応し、実績を重ねていく。
- ・計画に基づく実践力をいかに高めるかが課題。
- ・ボランティア活動については、子どもも親も楽しめてリフレッシュできるような活動であれば参加しやすいのではないかと。誰もが過剰に負担に感じることなく、ほどほどに楽しめる仕掛けを作る必要がある。
- ・実行力のある計画にしていきたい。

(2) 第4次八尾市地域福祉計画 中間見直しスケジュール

＜事務局から下記資料にて今後の中間見直しにかかるスケジュールを説明＞

【資料2】第4次八尾市地域福祉計画 中間見直しにかかるスケジュール
特に意見なし。

閉 会